105. 診療放射線技師養成における病院と大学の連携

Cooperation with Hospital in a University Course of Radiological Technology

北里大学医療衛生学部 ○桜井清子 ・荻原淳 ・岩波茂
 (Kiyoko Sakurai) (Atsushi Ogihara) (Shigeru Iwanami)

 池田俊昭 ・依田一重
 (Foshiaki Ikeda) (Kazushige Yoda)

同 医学部 松林隆
 (Takashi Matsubayashi)

(目的) 昨年4月、北里大学医療衛生学部が開設され、全国で4番目の4年制教育による診療放射線技師養成を目指す専攻が発足した。本学部は3学科8専攻より成り、その入学定員は300名、そのうち診療放射線技術科学専攻は50名である。本学は2つの大学病院を有し、臨床医療教育の充実を特色のひとつに掲げている。この特色を実質的なものとするためには、学部と病院との密接な連携プレイが必要である。病院との話し合いによって、連携プレイの望ましい形を模索しそれを具体化してゆくことが現在のわれわれの課題である。

(方法) 現在、我々は次のような基本的条件を病院側へ提案している。1. 技師長は学部の専任教員とする。2. 学部の専任助手のうち数名を病院勤務の技師の中から出向という形で用いる。これらの助手は2～5年の任期とする。3. 診療放射線技術学関連の講義および学生実習に関しては、必要に応じて、病院勤務の技師が兼任教員として指導にあたる。

すなわち、本学部診療放射線技術科学専攻の教員および大学病院放射線部の診療スタッフが一体となって教育にあたるという体制を明確にしておくことが円滑に目的を達成するために不可欠な条件であるとする。なお、本専攻のスタッフは助教授以上4名、講師4名（技師2名、医師1名）、助手4名（技師2名）、非常勤講師4名である。また、放射線部のスタッフ数および具体的な連携の形態（案）を下の表に示しておく。

(期待される結果)従来の医学部・病院・医師の間の関係を本学部・病院・技師の間にも確立しようという企てである。また、病院勤務の若手技師のうち基礎的研究への指向が強く、また、後輩の育成に関心のある者を学部の助手として任用することにより、学部教育および病院放射線部双方の活性化と充実が計れるものと期待する。

現在、本学には、医療学群という構想があり、医学部、看護学部、医療衛生学部、薬学部、病院が相互に関連を保ちながら効率よく教育、研究、診療にあたるというものである。これらの学部および病院とのスムーズな連携は自ずから診療の現場における優れたチーム医療を生み出すであろう。今回の我々の課題はこの医療学群の一翼を担うものと考えている。

(考察)急速に進歩する技術を駆使する医療の現場において、即戦力となり且つ新しい技術にも対応できる基礎的知識を身につけた技師を養成するためには、学部教育および臨床教育の場において、常に、現場の経験豊かな技師から薫陶を受けることが大切である。そのための体制作りは新設の教育施設にとっては欠かせない事柄である。

(まとめ) 本学部診療放射線技術科学専攻の教育における大学病院との連携の形態に関してここに提案した方法の良否を見きわめて、今後新設される施設の体制作りの参考になれば幸いである。

病院放射線部の診療スタッフ

	大学病院	大学東病院
技師	50名	20名
医師	11名	5名
看護婦	13名	4名

医療衛生学部と病院との連携（技師に関して）

病 院	医療衛生学部
技師長	〈----- 専任教員（講師以上）
係長以上	-----〉兼任教員：臨床実習責任者、講義
主任クラス	〈----- 専任助手：2～5年任期
同上	-----〉兼任教員：学生実習、講義
一般技師	-----：臨床実習協力

注) 技師長は大部分の時間を病院業務にあてる。
専任助手は週1～2日を病院業務にあてる。